



線路が紡ぐ物語

鉄道記念物・準鉄道記念物の18史

写真・文＝原田伸一

鉄道記念物は、歴史ある鉄道財産を後世に残すために日本国有鉄道が1958年に設けた制度である。JR北海道ではこれを引き継ぎ、2010年北海道鉄道130周年を機に新たな指定を加え、記念物は4点に準記念物は14点となった。いずれも北海道の鉄道発展に功績があった動力車や施設ばかり。それらが登場した時代背景をたどりながら、果たした役割などを紹介する。

第3回 【キハ82形1（準鉄道記念物第5号）】



12両編成で噴火湾沿いに快走する特急「おおぞら」（室蘭本線洞爺付近、1964年5月）

クリーム色を基調に、窓周囲を赤で彩った最新鋭の気動車がエンジン音を唸らせている。一九六一年（昭和三十六）十月一日早朝、函館駅は祝賀気分が満ちていた。北海道で初めて特急列車が発する瞬間だ。名称は広い大地を表現する「おおぞら」。テープカットに続き、くす玉が割れると同時に列車は札幌経由、旭川を

目指して動き出した。先頭車キハ82形の前面は曲面ガラスで優美さを強調。運転台は高い位置に作られた。一等車（現グリーン車）はリクライニング、二等車（現普通車）は回転クロスシート。窓は密閉式で客車に比べて安全と乗り心地が飛躍的に向上し、旅の楽しさを演出する食堂



小樽市総合博物館に展示されているキハ82形1

な走りっぷりである。それほど静かに走るといふことは、車両が優秀だからである」と絶賛している。この後、「おととり」、「北海」、「北斗」などの特急列車が続々誕生。小樽市総合博物館に展示

キハ82形は東海道本線の花形電車特急「こだま」の経験を生かして製造された。キハ気動車、ハは二等車を表す。函館―札幌間の所要時間を五十分以上短縮したばかりでなく、主要ルートに勾配が多い函館本線から、距離は長いが平坦な室蘭、千歳線経由に転換するきっかけにもなった。当時の鉄道専門誌に連載開始直後に乗った鉄道ファンの感想記があり、「列車はなお快走を続けている。振動もなく、いたって静か

されているキハ82形1には、「北海」のマークが付けられている。「おおぞら」がデビューして今年でちょうど五十年。非電化区間が多い北海道では札幌と函館、釧路、帯広、網走、稚内など主要都市を結ぶ特急は依然として気動車が主役だ。このため常に改良が重ねられ、現行の「スーパーおおぞら」、「スーパー北斗」などには振り子式気動車を使用されている。振り子式はカーブで車体を内側に傾け、高速で通過できるようにした技術だ。先頭車前面には「FURICO」のロゴマーク。それは車両が進化しても、北海道にスピード革命をもたらした初代「おおぞら」の輝きを今に伝えている。●